

豊かな腹突き出して蘭鑄<sup>らんちゆう</sup>は布袋葵の宮殿に棲む

谷岡重紀

今月のこの作者の六首は全部、金魚の歌である。中でこのランチュウの歌は、三枚目的な上句と豪華・華麗な下句のバランスが見事。水槽を泳ぐランチュウを見るとつい思い出してしまう、そんな一首にしあがっている。

思い出す北青山はその昔青山北町絵地図の似合う

矢代朝子

現在はビルだらけの北青山だけれど、何十年前前は、古い絵地図にあるような町だった、という意味だろう。作者が子供時代に住んでいた、ビルだらけになる以前の北青山のイメージらしい。想い出を作品化するときは、一つ、中継点のような何かを採用する工夫があるが、ここでは「絵地図」を持ってきて成功。

キッチンに寝転び「お腹すいたよ」と叫びたくなる

主婦の夕暮れ

木内美由紀

小さい子供のように手足をばたばたさせて、というニュアンスだろう。大人が手足をばたばたさせるのだから、相当広いキッチンでなければならぬ。そんな背景のイメージが一首をユーモラスにしている。

豊かなる面の女房の生え際の毛割れの刃えをわが目

よるこぶ

萩原桂子

新しい眼鏡を作って浮世絵展に行くまでをうたった今月の五首の最後におかれたのがこの歌。浮世絵の中の女房の髪の毛の生え際という細部が、新しい眼鏡のおかげで詳細に見ることができた、というのだ。「毛割れ」は、髪の毛

## 短歌の現在

### No.496 今月の14首を読む

#### 佐佐木幸綱

毛の一本一本まで彫りで表現する技法のことだという。

わが五体作りし身延の山恋し七面山の道たどりたし

後藤秀彦

今月の一連中に、「わが家の真つ正面に七面山春夏秋冬ながめ育ちき」とあり、「七面山」は作者が子供時代から見ていた古里の山らしい。山梨県南巨摩郡身延町にあり、標高は二千メートル弱だという。山がない関東平野に生まれ育った私には、うらやましい古里詠。

立夏きてぐんぐん青空せまくなる柿の若葉の生命力

よ

瀧 陽子

庭に柿の木があつて、新芽から若葉そして青葉の季節になると葉が茂って空がかくされてしまうのだ。「立夏きてぐんぐん青空せまくなる」は、簡潔かつ迫力ある表現として注目した。

あ、巣が落ちて割れてる卵 再生の防犯カメラにき

じ猫映る

日高尚子

鳥の巣が落ちて卵がわれているという不自然を、防犯カメラで点検して、犯人のきじ猫を見つけたという。まるで漫画のような筋立てが、やや古風なドキュメンタリーをみるようでほほえましい。なお、この落ちている巣は、他の歌から見て燕の巣のようだ。

稲佐山に添ひ寝を今日もしてらふ再々再々入院初

日

北川秀子

稲佐山が近くに見える病室に「再々再々入院」したというから、なんと五回目の入院をした、ということなのだろう。くり返し入院で気持ちが暗くなりがちだろう